

嫌われ将軍（おつさん）ですが
なぜか年下の美形騎士が離してくれない



ウーゴ・バンディ

レアランダ王国の軍人。
二十三年間ガイを支えてきた
古参の副官。

ラヒュ・ネスア

サグニテ王国の副将。
ゲインの忠実な部下で、
ガイを過剰に敵視している。

ゲイン・カレロ

元敵国サグニテ王国の猛将。
ガイとは何度も死闘を
繰り広げた旧知の仲。

イヴァン王

レアランダ王国の新王。

なぜか就任直後から
ガイを冷遇している。

ガイ・デオタード

レアランダ王国の将軍。英雄として讃えられていたが、
実質の追放命令を受け邪竜討伐に旅立つ。
仕事熱心なあまり、恋愛には縁がなかった。

エリク・マレーロ

ガイの部下。
伯爵令息だが、ガイに心酔して
家を飛び出した変わり者。
入隊後すぐにガイの従者に
抜擢された優秀な騎士。

目次

嫌われ将軍（おっさん）ですが
なぜか年下の美形騎士が離してくれない

番外編 愛され将軍のエリク鼻血阻止大作戦

嫌われ将軍（おっさん）ですが
なぜか年下の美形騎士が離してくれない

第一章 嫌われ将軍、国を追い出される

「ガイ・デオタード将軍、そなたに邪竜討伐の任を与える。我が命を果たすまで、この国に戻ることは許さぬ」

城内の広間に、新王イヴァンの冷ややかな声が響く。

集められた臣下たちがにわかにざわつく中、玉座の前に跪いた屈強な将軍は、頭を垂れたまま何も言わなかつた。わずかに焦げ茶色の前髪を揺らしただけで、微動だにしない。

将軍の名はガイ・デオタード。

二十二歳の若さでアランダ王国の将軍に抜擢され、今年で二十年が経つ。数多の戦で国を勝利に導き、先王に英雄の称号を授けられた男だった。

貫禄に磨きがかかつたが、凛々しく頑強さが溢れる顔立ちは若い頃から変わらない——初々しさがないと言えばそれまでだが、若くして将軍の任に就いても違和感のない風格を兼ね備えた男である。

年を重ねた今は、後進を育てながら国を、民を、王を守ろうとガイは心に決めていた。それが何

度も激戦を重ね、生き延びた自分の役目であると信じて疑わなかつた。

しかし新王は淡々とガイの決意を踏みにじつた。

「先日の諸国会議で、ここから遙か彼方にあるヨルリア山脈で邪竜が暴れ、近隣の国々では対応できずに困り果てているという話が出ていた。これを余は国の大事と捉え、我が国が誇る英雄を向かわせるべきだと判断した。ガイよ、見事に邪竜を討ち果たすのだ」

「……王命、謹んで承ります。これより討伐隊を編成し、邪竜のもとへ——」

「討伐隊は不要だ。お前だけで行くのだ。我が兵を連れていくのは許さん」

ざわり、と再び周囲がどよめく。

ガイは密かに息をつき、言葉を紡ぐ。

「イヴァン陛下、理由をお聞かせ願えますか？」

「邪竜の強さは神をも凌ぐと言われている。どれだけ兵を連れていったところで、無駄死にするのは目に見えている……将軍も兵を守りながら戦うのはやりにくかろう。邪竜にのみ集中し、英雄として存分に力を振るうのだ」

新王の話を聞きながらガイは悟つた。

これは事実上の追放だと。英雄という肩書きを持つ自分を体よく追い出すための大義名分である。今は亡き先王はガイに良くしてくれた。だが先王の息子である新王イヴァンからは、ずっと険しい目を向けられてきたことをガイは思い出す。

先王が崩御して新王が即位した時に、きっと冷遇されるだろうと覚悟はしていた。しかし、まさか追放されることになるとは夢にも思わなかつた。

王命である以上、異を唱えれば王に背いたと責められ、国を追い出される。

何を選んでも自分の道は決まつてゐる。だが――

ガイは垂れていた頭を、さらに深く下げた。

「必ずや邪竜を倒し、陛下の憂いを払うと誓います。ですから、どうか我が軍は解体せず、副将ウーヴに我が座を譲ることをお許しください。さすれば私は心置きなく邪竜に挑むことができます。何卒――」

「将軍が邪竜討伐に行くならば、そのようにしよう」

今まで苦楽を共にしてきた部下たちが、ガイの脳裏をよぎる。

ウーヴに軍を引き継ぐことができれば、王命を受けても彼らの処遇は今までと大きく変わらない。軍の頂にいた自分が野に下るだけだ。

安堵する裏で、ガイは自分の胸に虚無感が広がつていくのを感じる。

それでも口端を柔らかく引き上げ、心からの言葉を口にした。

「ありがとうございます。このガイ・デオタード、命に代えましても邪竜を討ち果たしてまいります」

王命を承つた後、ガイは城の敷地内にある軍の執務室へと向かつた。

分厚い木製の扉を開けると、執務机の前で副将のウーヴを始め、部隊長たち数人が円陣を組むようにはかを話し合つていた。

ガイが中に一步踏み入ると、ウーヴが振り向く。後ろで括つている青の長髪が揺れ、表情の読めない無の顔がガイを迎える。

「ガイ将軍、お待ちしておりました」

「何を話していたんだ?」

「……これからのこと」

普段から必要なことしか言わないウーヴだが、今日はいつにも増して淡々としている。他の者たちも妙に表情が硬い。

どうしたんだとガイが尋ねるより前に、ウーヴが一步前に出て話を続けた。

「王命の件はすでに把握しております。ガイ将軍の意向通りに軍は私が引き継ぎますので、どうか心置きなく出立なさつてください」

「あ、ああ……」

思いのほか呆気なく話が終わり、異様な沈黙が広がる。

空気が重い。息が詰まり、ガイはわずかに眉を寄せた。

「俺はこれから邪竜退治に向かうが、いつ戻れるかわからん。もしかすると命を落とすかもしけない。だから、ひとつ聞かせてほしい」

「なんでしょうか？」

「お前たちにとつて、俺は良い上官だつたか？」

ガイには将軍職に就いた頃から、気になつていていたことがあつた。

多くの兵をまとめ上げ、激戦を重ねてここまでやつてきた。その間、副将ウーゴも部隊長たちも、集まつた兵たちも、ガイの過酷な指示に従い続けた。英雄と呼ばれる存在となれたのは、彼らの血と汗と努力のおかげでもあるとガイは考えていた。彼らには感謝の言葉しかない。

ただ、自分の命令にずっと不満を持ち、溜め続けてきたのではないか？ という疑問が常につきまとつていた。

なぜなら、彼らから笑顔を向けられた覚えがないからだ。

談笑の輪の中に入つたことも、無礼講で酒を酌み交わして騒いだこともない。いつも先ほどのようく、ガイが入つてきた途端に部下たちは身を強張らせ、口を閉ざし、必要な要件を話すのみ。

自分たちの間には分厚い壁があるのだと、痛感せずにいられなかつた。

それでも命がけで自分について来てくれた。家族も恋人もいないガイにとつて、彼らは何よりも大切な存在だつた。

そんな彼らと離れなければならぬ。下手をすればこれが今生の別れになる可能性もある。だからこそガイは真実が知りたかつた。

ふう、とウーゴは息をつく。感情のない紫の瞳が、いつになく冷ややかにガイを射た。

「ガイ将軍……貴方は先王陛下の信が厚く、その実力も疑いなきものでした。私も尊い方々も、貴方の力は素晴らしいと心の底から思つていました。しかし——」

ウーゴの眉間に皺が寄る。好意とは程遠い眼差しに、殺氣にも似た棘々しさが混じる。

「貴方の無茶に応えるたび、生きた心地がしませんでした。我らの軍ばかりが多くの汗をかき、血を流し、実現困難な貴方の策に苦しみ喘ぎました……ようやくその日々から解放されるのです。嬉しくてたまりません」

「そうか、そこまで苦しい思いをさせていたとは……今まで気づかず、すまなかつた」

「謝らないでください。必要に迫られてのことだとわかつています。ガイ将軍の策がなければ、我々は全滅していたでしょうし、国にも大きな被害が出たことは明白です」

もう一度ウーゴは息をつくと、明瞭な声で告げた。

「国にとつて貴方は素晴らしい将軍でしたが、我々にとつては悪夢のような上官でした。もう一度と顔も見たくありませんが、邪竜討伐の吉報を心よりお待ちしています」

ガイは執務室を出た後のことをよく覚えていない。

自分が部下に好かれているなどと、思い上がつたことは一度もない。これまでの戦いをどう振り返つても、部下たちを死地へ送り、危ない橋を渡らせ続けてきた極悪の上官だとガイは自覚していた。

拒絶される覚悟はしていたつもりだった。だが面と向かって意思表示された瞬間、ガイは自分の胸に大きな穴が開いてしまったような感覚に襲われた。

自分は嫌われている。

以前から厳しい目を向けていたイヴァン王だけでなく、部下たちからも嫌われていたことが明確になり、動搖が収まらなかつた。

そして、夢の中にいるかのようなぼやけた感覚のまま、出立の準備を進めた。

◇ ◇ ◇

王命を承つてから三日後、ガイは慣れ親しんだ茶色い愛馬に乗り、ゆっくりと王都から離れていく。

途中、何度も馬を停めて景色を見た。なんとも未練がましいと思ったが、自分が守り続けたものを目に焼き付けたかった。

（邪龍討伐まで何年かかるかわからない。戻ってきても俺の居場所はなくなっているだろう……これで見納めかもしれない）

これまで戦に勝利して帰還すれば、城下町の大通りには必ず左右に民が集まり、歓声が上がつていた。

噴水のある広場は、いつも子どもたちの英雄ごっこで賑わっていた。

大通りから外れた所にある隠れ家のような酒場は、国の英雄が来たと気づいても静かに飲ませてくれた。

（ひき）
龜鳳にしていた鍛冶屋は、無愛想な主^{あるじ}がブツブツと文句を言いながら、いつもガイの望みに応えていた。

きっと國の民からは嫌われていないだろうと思つたかった。だが、今のガイにその自信は微塵^{みじん}もない。

それでも彼らのために剣を振るつてきたことに、後悔はなかつた。

（皆、どうか達者に暮らしてくれ）

心の中で民に別れを告げると、ガイは少しづつ馬の歩みを速めていく。

次第に辺りの建物は数を減らし、どこまでも続く街道と草原が広がり始める。人気^{ひとけ}はなく、まるで自分のこれから人生を象徴しているようで、ガイの胸はかすかに痛んだ。

本当に一人になつたのだ、という実感が今になつて重くのしかかつてくる。

旅立ちからこんな気弱になつてどうする、と自分を鼓舞するために、ガイは愛馬の腹を蹴つて街道を駆け抜けようとした。

その時、後方から馬が疾走してくる音が耳に入つてきた。

それは瞬く間に気配と共に近づき、ガイの真後ろで停まつた。

「ガイ様！」

凛として、よく通る若い男の声。

馬に乗つたままガイが振り向くと、そこには黒い馬に乗つた青年が息を切らし、形の整つた眉を寄せながら険しい表情を浮かべていた。

銀の短髪が風になびき、前髪が流れ、凛々しい顔がはつきりと見える。

涼やかな切れ長の目に、海を思わせる瞳の色。一見すれば冷静さの塊のような男だが、それに反して彼の顔は苛立ちに満ちていた。

「……何用だ、エリク・マレー口？」

ガイが尋ねると、青年——エリクはキッと睨みつけてきた。

「何用も何も、貴方に文句を言いに来ました！」

突然のことには呆気に取られた。

エリクは名家であるマレー口伯爵家の令息だが、訳あつて勘当され、二十歳を迎えてから見習い騎士になつた稀有な青年だ。

貴族の令息が騎士になりたがること自体が珍しく、かつ家を継ぐはずの次期当主が跡を継がずに騎士になるなど前代未聞だ。

名家の息子が入隊してきたという話をガイが聞きつけ、新兵の訓練に顔を出した時にエリクを初めて見た。剣を振るう動作も、待機中の立ち姿も、常に背筋が伸びて美しい上に外見も整つていた

ため、大勢の中にいても一目でわかるほど目立つ存在だった。

これで実力がなければ、たとえ貴族の血筋であろうが末端の兵として扱われただろう。しかしエリクは入隊してすぐに頭角を表した。剣技の巧みさに魅了され、ガイが直接声をかけて自分の隊に引き入れたのだった。

どれだけ激戦でもガイから離れずについて行ける馬術や判断力もあり、連戦をものともしない、疲れ知らずの体力の持ち主だ。そんなエリクにガイは一目置いていた。

実力だけならば部隊長に匹敵する。しかし本来なら成人する前から騎士見習いとなり、訓練を重ねながら軍に馴染んでいくが、エリクは騎士になつて二年しか経っていない。

さらに、言動は他者に厳しく、周囲と息を合わせることに苦労しているように見えた。

だからガイは戦や遠征などの際に、エリクを臨時の従者として自分の傍に置いて軍のことを教え、エリクが馴染めるようにしてきた。細かいことによく気がつき、テキパキと動いてくれるエリクは、ガイとしてはとても助かる存在だった。

だがエリクもまた、他の者と同様にガイが話しかけても反応は薄く、必要最低限の会話しか交わしていない。

そんな彼が感情をここまで露わにし、大きな声で文句があると怒鳴つてくる。今のガイには理解が追いつかず、何度も瞬きするばかりだった。

「文句どなうのは？」

「ガイ様もご存知の通り、私はマレー家から次期当主の器ではないと勘当されて騎士になりました。貴方のもとに集え、いち早く手柄を挙げて出世し、一族の者たちに実力を示せると思つて入隊したんです。それなのに、手柄らしい手柄を立てる前にいなくなるなんて……」

エリクの話を聞き、なるほど、とガイは納得がいった。

間違いなくガイの下にいれば戦いの機会が多く、手柄を挙げやすい。場合によつては部隊長どころか、将軍の位を授かつてガイと並び立つ可能性すらある。

生家からの勘当を解きたいにしても、戻らずに見返したいにしても、ガイのもとで戦い続けることはエリクに大きな利があった。

それなのに自分は国を離れなければいけなくなつた。

思わずガイはエリクへの申し訳なさで眉を寄せる。

「期待に応えられなくてすまなかつた……だが俺の後任にウーゴが就いた。彼も積極的に動き、先手を打つ戦いをする。このままウーゴの所にいれば出世は早い——」

「先ほど辞めてきました」

「なんだと?」

「もうあの場所に用はありません。ガイ様でなければ意味がないので」

しつと言いながら、エリクは馬を近づけてガイの隣に並ぶ。

「ガイ様は英雄。その肩書きがどれだけ名誉で特別なのか、わかつていらっしゃいますか? 同じ

「なんだと?」

「なんとも厳しいな……それで、わざわざ俺を追つてきたというのか」

「はい。どうか英雄のお供をさせてください。ガイ様が無事に邪竜を倒し、この国に帰還する手伝いがしたいのです……英雄を支えて王命を果たしたとなれば、私も一族が無視できぬほどの名誉を得られますから」

損得を考えての決断。理解はしたが、随分と買い被られたものだとガイは思う。

実質、この王命は国からの追放なのだ。ついて来たところで、本当にエリクが望むような名誉が得られるかは怪しいところだ。エリクのためを思うなら、名誉が欲しいなら、戻れと言うべきだろう。

しかしその言葉が喉の奥で止まる。口を開いて出てきたのは——

「わかった、好きにすればいい」

ゆつくりとガイは馬を動かし、鼻頭を行く先に向ける。

馬の腹を軽く蹴つて前に進むように伝えると、愛馬は小さく鳴き、歩き出す。わずかに遅れてエリクの馬の足音が聞こえてきた。

エリクには悪いと思う。それでも今のガイに、理由はどうあれ、自ら寄つてきた者を追い払うことはできなかつた。

まばらな馬たちの足音が、心地よい律動を生み出していく。この旅路が一人ではなくなったことに、ガイの唇は小さく綻んでいた。

◇ ◇ ◇

王都を離れてガイたちが小さな町にたどり着いた頃、日は完全に落ち、星々と淡い月明かりが闇の世界をささやかに照らし出していた。

王都に近いこともあり、町の規模に対しても人の往来は多い。

だからこそ、夜の到着はある問題を生み出しあつた。

「ごめんなさいねえ。今、空いている部屋は一人部屋だけなのよ」

そう——宿の部屋問題だ。

この町に宿は二軒しかなく、先に訪れた一軒目は満室。ここが駄目なら野宿するしかなかつた。恰幅のいい女将が申し訳なさそうに部屋の空き状況を告げた瞬間、隣でエリクの体が強張つたことにガイは気づく。

自分は新王からも部下たちからも嫌われていた。エリクも名譽を得るためについて来ただけであつて、自分のことを慕つての行動ではない。きっと皆と同じように、人としては嫌つているのだろう。この硬直がそう物語つている。

それでもガイは怒りもせず、これが現実だと受け入れた上で女将に伝えた。

「別に構わない。雨風が凌げるなら、俺は床で寝ても——」

「何を言つているんですか!? ガイ様にそんな真似はさせられません!」

思いがけずエリクが慌てた反応をしたので、ガイは心の中で驚いた。

思い起こせばガイの従者をする時、エリクは城の厳しい侍女長のように衛生面に細かかった。野営の天幕では簡易ベッドに清潔なシーツを敷いたり、寒い日には事前に用意した焼き石で中を温めてくれたりと、常に細やかな気遣いがあつた。その丁寧な仕事ぶりはありがたかったが、野外で寝ることに抵抗のなかつたガイは、もつと雑でもいいのだが……と内心思つていた。

今も丁寧に扱おうとするエリクに、ガイはいきすぎだという印象を拭えない。しかし、自分の肩書きや互いの立場を考えれば当然かと思い、わずかに首を振つた。

「エリク、ここは城じやない。しかも君は軍を辞めて俺について来ている。つまり君はもう俺の部下ではない。部下でなければなおのこと、無理はさせられない

「しかし——」

「とりあえず部屋は確保しよう。女将、その部屋を使わせてもらえないだろうか?」

ガイが手にしていた荷袋から宿賃の銅貨一枚を取り出して渡すと、女将はニッと口端を引き上げた。

「もちろん歓迎だよ。二階の突き当りの部屋を使つておくれ」

「ありがとう。エリク、行くぞ」

何か言いたげに口をまごつかせるエリクを尻目に、ガイは宿の二階に上がっていく。一步遅れて、エリクの足音が後ろをついて来る。

部屋に向かう最中、はあ、と悩ましげなエリクのため息が聞こえてきた。
(嫌な相手と一人用の狭い部屋で夜を越すのは、やはり苦痛なのだろうな……なるべく気配を消して、少しでも俺を気にせず過ごせるようにしなければ)

まだ王都を出て一日も経っていない。それなのに休むことができずに疲れを溜めてしまえば、邪魔を見つけるまでの旅路に耐えることなんてできないだろう。

せめてエリクがこの旅路の犠牲にならないようにしなければ。自分とは違い、まだまだ未来のある若者なのだからと、ガイは密かに意気込む。そしてエリクの不満そうな気配に気づかないフリをしたまま、部屋の扉を開けた。

簡素なベッドと小さなテーブルがあるだけの、こぢんまりとした部屋だつた。

心なしか一人用にしてはベッドの大きさが広い気がして、ガイは小首を傾げかしる。それからすぐに本来の用途を察して頷く。

「ああ、ここは……旅の者が商売女を連れ込んで、交合を楽しめるようになつてているのか」

何気なく呟いた直後——ゴンッ、と壁を大きく殴打する音がして思わず振り返る。

なぜかエリクが木の壁に強く頭を打ち付け、そのまま固まっていた。

「ど、どうかしたのか、エリク？」

「……いえ……ちよつと自分の未熟さを呪いたくなりまして」

功名心の強さといい、己を未熟だと律そうとするところといい、どうやらエリクはなかなかの野心家で努力家らしい。そんな若者を、ガイは好ましく思う。内心感心しながら荷袋を部屋の隅に置くと、エリクのほうへ振り返った。

「寝床の相談は後にして、まずは腹ごしらえと風呂だ。宿の裏に温泉があるらしいから、後で行くぞ」

「温、泉……」

なぜかエリクは胸元を押さえ、うつむきながら肩を震わせている。

やはり嫌な相手と食事も風呂も一緒にするのは堪たまえるのだろう。これまでの様子を考えると、ガイにはエリクがそう考えているとしか思えなかつた。

宿の食堂で食事をしている間も、エリクの様子はおかしかつた。

テーブル越しに向き合いながらの食事だつたが、やけに遠い目をして、目の前のガイを視界に入れるることはなかつた。心ここにあらずというか、現実逃避しているというか、平静とは言い難い状況だつた。

理由を尋ねたい気持ちはあつたが、ガイは何も聞かずに食事を続ける。

聞いても困らせるだけで、理由など教えてはくれないだろう。そうして滲み出でてしまう困惑から、エリクが自分に向いている嫌悪を感じ取るだけだ。

嫌われているとわかつていても、改めてその気配を感じてしまうと、あまたの敵と相まみえてきた百戦錬磨のガイであつても胸が痛む。

二人は食堂の賑わいに包まれながら、黙々と食事を済ませた。

そして宿の裏にある温泉に入るため、ガイたちは脱衣所で服を脱ぐ。他の客が何人かいたが、ガイの肌が露わになつた途端、皆やけに落ち着きがなくなつた。

「ひつ……！」

「あー……忘れ物を取りに行かないと……」

「ど、どうぞ、ゆつくり入つてください……っ」

そう言うと各々に脱いでいたものを素早く身につけ、脱衣所から出て行つてしまつた。

(……もしや、この体のせいか?)

ガイは首を傾げながら自分の体を見回す。

十五歳で騎士になり、将軍の地位まで昇り詰めた後も、連日のように戦つてきた体だ。筋肉の付き方は明らかに常人とは違ひ、胸も腕も筋肉のひとつひとつが盛り上がり、くつきりと筋を作り、力の凝縮を感じさせる。それに加えて無数の傷痕が肌を飾り、歴戦の凄みを乗せていた。

一般人からすれば威圧的に見えて仕方ないと、ガイは気づいていた。

だが邪竜討伐に向かう中、風呂にいつでも入れるとは限らない。彼らには悪いが、入れる時にしつかりと入りたかつた。

風呂場に続く扉を開けると、ひんやりとした夜風が吹いてくる。規模は小さいが、星空が見える露天の風呂だった。

「これならゆつくりと浸かれそうだ。エリクは長湯するほうか? もし早く上がりたければ、俺より先に上がつても——エリク?」

返事がないので振り返ると、エリクはまたうつむいていた。しかもなぜか鼻を摘んでいる。

ガイよりも厚みはなく色白ではあるものの、しつかりと鍛えられたエリクの体はやけに赤い。耳まで赤い。まだ風呂に入つていないのに、まるでのぼせたような状態だ。

「だ、大丈夫かエリク? まさか湯気だけでのぼせたのか?」

「い、いえ、平気です。早く入りましょうう」

顔を上げたエリクの表情は、口元や眉が妙にヒクヒク動いて歪んでいる。まるで何かを堪えてい るような顔だ。無理をしているのが伝わってくる。

そういえば従者として傍に置いている時に、天幕内でエリクに着替えを手伝つてもらつていたが、いつも顔を背けるか、目を閉じるかだったことをガイは思い出す。なぜそんなことをしているのか気にはなつたが、問題はなかつたので無理に聞かなくてもいいだらうと放置していた。

だが今のエリクの様子から、これまでの行動の理由が垣間見えてしまい、心中でガイは顔をしかめてしまう。

(そんなに無理をして俺に付き合わなくともいいだろうに)

一緒に入るのが嫌ならば、別々に入れば良かつただろう、とガイが言おうとした時だった。

「ガイ様、お体を冷やしてはいけません！ さあ！」

グツ、とエリクに背中を押され、半強制的にガイの足が湯船に向かっていく。

(なぜこうも急かされる?)

内心首を傾げながら、ガイは木桶を手にしてかけ湯をする。少し熱めの湯が、夜風で冷えた肌を過敏にさせる。わずかにジンジンとした疼きを覚えながら湯に浸かれば、思わず息が溢れた。

「はあ……良い湯だ。少し熱めだから、ゆっくり入ったほうがいい——」

ザブンッ！

水しぶきを上げながら、エリクが豪快に湯に浸かる。それはもう勢いよく飛び込み、水しぶきで互いの髪を濡らしてしまってはどだつた。

「エリク、そんなに早く入りたかったのか？」

思わずガイが尋ねると、エリクは「はあああ……」と細長いため息を吐き出した後、大きく頷いた。

「ええ。ガイ様に見苦しいものをお見せする訳にはいきませんから」

「見苦しいもの？ 特に目立つたものはなかつたような気がするが、体に傷痕が残っているのか？ 戰場に出ていれば、誰しもできる。俺も見ての通りだ。こうして湯に浸かると、赤みが増してより鮮明になる痕もある。だから気にしなくていい。それは戦士の^{ほめ}誉れだ」

「……つ、そ、の……」

「見たところ上半身は綺麗だが、脚をやられたのか？ 俺も戦ではないが、右の内ももを火傷して残つた痕がある。見るか？」

「安易に、そんな刺激が強すぎるところを見せようとしないでください！」

突然大声を上げると、エリクは勢いよく背を向け、顔半分ほどまで湯に浸かってしまう。

エリクの言動がまつたくわからない。読めない。理解できない。

何度か瞬きしてから、ガイは腕を組んで眉根を寄せる。

（ううむ……もしや嫌いな俺に肌をなるべく見せたくないからか？ そして俺の肌も目にしたくない、と。だとしたら悪いことをしてしまつたな）

太ももの内側の何が刺激が強いのかはさっぱりわからないが、怒つたならそういうことだろう。

嫌な思いをさせてしまつたからには謝らなければ、ガイは深く頭を下げた。

「すまなかつた。むしろ俺の体のほうが見苦しいのに、見せつけるような真似を——」

「見苦しいなんて、とんでもありません！」

勢いよくエリクが振り向き、しなやかな両腕がガイに伸ばされる。

そして肩を掴み、必死の形相を向けてきた。

「これまで幾度となく窮地を乗り越えて、國を勝利に導いてきた英雄の体が、見苦しい訳がないじゃないですか！」

「い、いや、しかし、綺麗なものではないのは確かだが」

「ガイ様の体は何もかもが完璧です！ 鍛え抜かれた肉体はもちろんのこと、人を真っ直ぐに見てくださる黒曜の瞳も、たまに跳ねている髪の寝癖も、ぼんやりしていると薄く開いている唇も、剣ダコができる豪快そうなのに、寄ってきた街の子どもたちの頭を優しく撫でる手も――」

「待てエリク、君はそんなに俺を觀察していたのか。しかも何かおかしなことを言つていなか？ 俺のどこが完璧だというんだ？」

「私はいたつて正常です。真理を言つています。とにかくガイ様が見苦しいなんてことはありませんから！」

興奮気味に硬く拳を握ったエリクに断言された瞬間、ガイの目が丸くなる。

——ポロリ。

目元に熱が集まつたかと思うと、ガイの頬に涙が零れ落ちた。

「……ガイ、様？」

「悪い……これはその、ずっと嫌がられているかと……そうでもないのかと思つたら、涙腺が緩んでしまつて……うむ、恥ずかしいな」

いつも自分を褒め称えてくれた先王が生きている間は、他の者に距離を取られ冷ややかな目を向けられても、ガイは気にならなかつた。

しかし先王がいなくなつた今、こうして熱のこもつた言葉で称えてくれる者は皆無だつた。二度とそんな称賛の言葉は聞けないと思つていただけに、ガイの涙腺がますます緩んでしまう。顔や耳が熱く感じるのは、湯に浸かつてているからだけではない。

一粒、二粒と溢れる涙を拭うと、ガイはバツが悪そうに目を逸らしつつ口を開く。

「情けないところを見せてしまつたが、これから道中よろしく頼む。言つた通り、エリクは俺の部下ではない。もし嫌ならばいつでも離れて構わないが、そうでなければ互いに死なないよう、助け合つていこう」

年の離れた若者に、改めてこんなことを言うのは照れくさい。しかし自分を見苦しくないと即答してくれたエリクに、傷ついた心が癒やされた。

城内の誰もが嫌つていた自分のことを、彼は嫌つていない。だから、エリクにとつてこの旅が少しでも有益なものになるように協力できれば、とガイは思つた。

手を差し出し、握手を求めてみる。

だが、エリクの反応がない。

ガイが瞳を動かしてエリクを真っ直ぐに見ると——全身が茹でたタコのように赤くなり、白目を

向いていた。

「エリク!? まさかのぼせたのか？ しつかりしろ！」

慌ててガイはエリクを正面から抱きとめ、抱き上げて風呂から出る。

その際、ガイの視界にエリクの下半身が入り込み、思わず二度見してしまった。
(こ、これは……大きいな。というか、勃^{たつ}ってるのか?)

自分もそこは大きいほうだという自覚はあるが、エリクのそれは明らかに上だ。
見られたくなかったのはこれだったのかと理解し、ガイはなるべく下を見ないようにして、エリクを抱えながら脱衣所に向かう。

(若い時は溜まりやすいからな。道中はそういうことにも気を配らねば)

これからは、風呂は交代で入るようにしよう。自分が長湯するようにすれば、エリクは生理現象で昂つたものをどうにかできるだろう。一緒に旅をしていく中で、自分で抜いて処理する時間は絶対に必要だ。

ガイはそう悟り、決意した。



エリクが目を覚ましたのは、部屋のベッドに寝かせて半刻ほど経つた頃だった。

「あ……私は、いつたい……」

「気がついたか、エリク」

エリクの額に乗せた濡れタオルを替えようとしていたガイは、まだぼんやりしている彼の目を覗き込む。

「風呂でのぼせて気を失つたんだ。気分はどうだ？ 起き上がれそうか？」

「は、はい……大丈夫です」

ゆっくりと起き上がりつたエリクに、ガイは水入りのコップを渡す。

鈍い動きながら水を一気に飲み干した後、エリクは自分が裸のまま下半身にタオルがかけられていることに気づき、青ざめた。

「ご迷惑をかけた上に、汚らわしいものを見せてしまうなんて……っ！」ガイ様、申し訳ありません！」

「気にしなくていい。目の前で問題が起これば助けるのは当然だ。もう大丈夫そうなら良かつた」
ガイが気遣つて下半身のアレには触れずに話すが、エリクは額を押さえて大きく息をついて落ち込み続ける。

「本当に一生の不覚です……ガイ様の目を汚してしまったなら、鍵でも取り付けて封印するか、いつそ切り落としてしまおうか……」
「やめるんだ。若い時にはよくあることだ。今までそんな事例を山ほど見てきた」

「……そんなに見てきたんですか？」

「ああ。戦や訓練が終わつた後、公衆浴場に行つて兵士たちと汗を流す機会はよくあつたからな。おそらく戦いの興奮が冷めていなかつたせいだろう」

だからこの件もおかしなことではないし、恥じることでもないから気にするな、と心の底から思
いながら、ガイは思い出を語る。

だが、なぜかエリクはさあつと青ざめ、うつむいて頭を抱えてしまう。
安堵するどころか絶望しているようにも見えたが、顔を上げた時にはエリクは何かを覚悟したよ
うな凛々しい表情を浮かべていた。

「二度とこのようなことが起きないよう、己を抑えてみせます。道中、必ずガイ様をお守りします
から、これからも一緒に入浴させてください」

「守る？」 というのはよくわからんが、エリクがそれでいいなら俺は別に――」

「ありがとうございます！」

妙に元気になつたエリクに首を傾げたくなつたが、本人がそれでいいなら……とガイは受け流す。
年齢が離れていれば、考え方も見える景色も思うところも違う。よくわからないことを口にして
いるのは、そのせいだと思うことにした。

ガイは軽く背伸びをした後、エリクから離れて壁際へ向かう。

「そろそろ寝るぞ。明日は山を越えることになる。しっかり休んでくれ」

「はい。今ベッドを空けますから、ガイ様はこちらにどうぞ」
エリクの言葉に、思わずガイは眉間に皺を寄せた。

「何を言つているんだ？」 のぼせて倒れたんだ。ベッドを使うのは君のほうだ」

「ガイ様を床に寝させるだなんて！ 私はもう大丈夫ですから、ガイ様がお使いください」

「俺は一ヶ月連続で野宿して、木に背を預けながら寝たこともある。床で横になれるだけでもあり
がたい。だから気にしなくていい」

「そんな苦労、もう一生しないでください！ この国でたくさん苦労されてきたのですから、これ
からは若輩者の私が代わりに背負います」

「気持ちは嬉しいが、さつきエリクは倒れただろ。無理はするな。俺にそんな気遣いはいらぬい
「無理などしていません！ 今すぐ空けますから――」

やけに頑固なエリクとしばらく言い合いになり、話は平行線を辿つてしまつ。

何を言つても折れない様子に、ガイは思わずため息を零した。

「……その様子だと、無理にベッドで寝させても気が立つて休めそうもないな」
「わかつていただけましたなら、どうかベッドをお使いください」

「ああ。一緒に使うぞ」

ガイの一言にエリクが固まる。

石化の魔法にでもかかつたのかと思いたくなるほど、瞬きも息遣いもすべてを止めてしまつた。

何が起きたのだ？とガイが様子を窺つていると、エリクはぎこちない動きでガイを見上げた。

「……私と、一緒に寝られる？」

「どちらも床で寝ない道はそれしかないだろ。俺の寝相は悪くないほうだと思うが、布団と勘違いして抱きついてしまうかもしれない。その時は遠慮なく起こしてくれ——エリク？」

エリクの目は開いているが、瞳がまったく動いていない。

まさか気絶しているのか？とガイはエリクの目の前で手をヒラヒラと振つてみる。手を何往復かさせた頃、エリクがハッと我に返つた。

「よ、よろしいのですか？」

「俺が言い出したんだ、いいに決まつていて。エリクが嫌ならば俺は床で寝るが……」

「ありがとうございます！喜んで！」

（快諾してくれて良かつたが、俺相手に『喜んで』はどうなんだ？）

エリクの反応に首を傾げるしかなかつたが、これで話は決まつたから良かつたとガイは思うことにした。

その夜、二人はひとつベッドに並んで寝た。

棒のように頭の頂から足の爪先までピンと硬直したエリクが気になつたが、眠気はすぐに訪れ、ガイは素直に身を委ねる。

意識が途切れる間際、かすかにエリクの呟きが聞こえた気がした。

「ああ、こんな日が来るなんて——」

ため息混じりの、小さく揺れた声。どこかうつとりしたような響きもある。

英雄や将軍という肩書きがあるとはいえ、国を追い出された中年の男と一緒に寝るなんて、どう考えても良いものとは思えない。

だからきつとこれはエリクの嘆きの呟きだ、とガイは思う。

心から申し訳ないと感じながら、ガイは眠りに落ちていつた。

——翌朝。

ガイが目覚めると、二つのしなやかで引き締まつた腕に体が捕らわれていた。

視界に広がるのは見た目よりもたくましい胸。

寝たままエリクに抱き締められていることに気づき、ガイは固つた。

（こ、これはなんだ？エリクは俺を布団と勘違いしているのか？俺のほうがやらかすと思つていたが、まさか逆になるとは……）

息をすることにエリクの熱と、爽やかさと甘さが混じつた体の匂いがガイの鼻先に広がる。妙に背筋がむず痒い。恥ずかしいことこの上なくて、思わずその胸を叩いた。

「起きてくれエリク。早く目を覚まして俺から離れないで、君が不快な思いをすることになるぞ」寝起きが悪いのか、エリクはなかなか起きてくれない。

これでは埒^らが明かないと、ガイはエリクの肩を掴んで大きく揺らす。そこまでして、ようやく小さな唸り声が聞こえてきた。

「んん……おはようございま、す……」

「やつと起きたか。ほら、早く俺から離れるんだ。恥ずかしくてたまらん」

「離れ、る……?」

まぶたが小刻みに震えた後、わずかにエリクの目が開く。ガイと視線が合った瞬間、カツと目を見開き——ブパアアアアツ、とエリクから大量の鼻血が吹き出した。

「うおっ、だ、大丈夫か!? とりあえず鼻を押さえる。手頃なタオルを持つてくる」「す、すみません……寝起きには、刺激が強すぎました……」

(……何が刺激になつたんだ?)

やはり年が離れているせいか、エリクの言つていることが度々わからなくなつて、ガイは眉間に皺を刻む。しかし昨夜の風呂の件と今朝の鼻血で確信した。どうやらエリクはのぼせやすい体质らしい。これからの道中、その点は気遣つていこう。

そう考えを固めながら、ガイは衣装棚から宿のタオルを手にし、エリクの介抱に向かつた。

Side 副将ウーゴ

ガイ将軍を長年支えてきた、副将ウーゴ・バンディ。

彼は鉄の仮面を被つたように、表情が変わらない男だつた。

何が起きても動じず、淡淡となすべきことをこなし、ガイの戦略をいち早く理解して手を回してきた敏腕の副将だ。

ウーゴの顔から感情を読み取れる者はいない。

——が、彼の行動は第三者から見れば一目瞭然だつた。

時はガイが王命を受ける直前まで遡る。

ガイが城内の広間に呼ばれたその時、ウーゴは報告用に部下を一人だけ向かわせ、他の部隊長たちを執務室に集めていた。

「ウーゴ様、やはりイヴァン陛下はガイ様を……」

一人の部隊長が口を開く。大柄で力自慢のテオだ。いつもは自信に溢れた快活な男だが、今は声を潜め、憂いを覗かせていく。

ウーゴはわずかに間を置いた後、短く頷いた。

「間違いなくガイ様を追い出すつもりでしょう。先王陛下が病で倒れられた頃から、そのように動いておられましたから」

「なぜ英雄であるガイ様を、イヴァン陛下は冷遇なさるのか？ 自分には理解できません」

テオのぼやきに他の部隊長たちも頷く。

彼らの疑問も不満もよくわかる。しかし長年ガイの傍に居続けたウーゴは、この冷遇の理由を察していた。

「……すべては先王陛下の寵愛が、ガイ様に向かいすぎたせいですよ」

ウーゴがガイの部下になつたのは二十三年ほど前——ガイ十九歳、ウーゴ十五歳の時だつた。

『君がウーゴか。これからよろしく頼む』

まだ青さが残つていた頃のガイは、今よりもはつらつとしていてウーゴには眩まぶしく見えた。

鍛え抜かれた筋肉に凜々しく整つた顔立ち。真っ直ぐ誠実に相手を見る黒曜の眼差し。ただそこにいるだけで周囲を安堵させてしまうような頼もしさを、ガイはすでに身につけていた。

ウーゴを年下だと侮つた気配が一切ないことは、握手した瞬間にわかつた。

深く指を食い込ませた、力強い握手。しっかりと握った手から、『自分の背を預けるから、君も

同様に俺に預けてくれ』という意思が伝わってきた。

あの瞬間に、ウーゴの心はガイに囚われた。

そして共に過ごす時間が増えるにつれ、ウーゴは様々なものを目ににしてしまつた。

先王はいつもガイを近くに置きたがつた。

近くの森で狩りをする時に必ずガイを連れていくだけでなく、城の中庭を散歩する時でさえ呼びたがつた。

誰が見てもガイは先王の寵愛を受けていた。血の繋がつた実の息子たちよりも、ガイを隣に置きたがり、笑いかけ、話をしたがつた。

少し離れて待機しながらその光景を見ていたウーゴの目は、先王の気持ちを見抜いていた。

他の者には見せない、完全に気を許した先王の口元の綻ほつぶび。

后きさきや側室きさきにすら向けたことのない、熱を帯びた眼差し。

どれだけ白髪や皺が増えてても、先王がガイに向ける顔は恋する少年のような初々しさがあつた。その様子を、息子であるイヴァン王はずつと見せつけられてきた。

家族でもなく、美姫たちでもなく、ただ一人の屈強な英雄にのみ、先王の愛が向けられている様を。

「——当時を知る者に聞けば、ガイ様は子どもの頃から先王陛下に気に入られていたとのこと。イヴァン陛下が幼き頃は、むしろガイ様を慕つていたように見えましたが、年を重ねるごとに陛下のガイ様を見る目が凍つていきましたね」

今までを思い出しながらウーゴが先王と現王の話をすると、童顔の部隊長ミシェルからため息が聞こえてきた。

「そんな頃から罪づくりだつたんですね、ガイ様」

思わずウーゴは何度も大きく頷いてしまう。

「ええ、本当に。下手すれば先王陛下のお手付きになつて、側室になつていていたかもしません」

傍から見ていて、危ういと感じたことは幾度もあった。

ただでさえ先王はガイに近づきたがり、話をする際も肩に手を置いたり、手を繋いだり、ひどい

時は腰に手を回すことさえあった。

どう考へても先王にはその気があつた。

無類の強さを誇るガイだが、同時に忠誠心も厚く、王の命に背くことなど考へもしない男だとうことをウーゴはよく知つていた。

先王が手を出せば、望まぬことであつてもガイは拒絶しない。

だからウーゴは常に目を光らせ、ガイと先王を二人きりにさせまいと立ち回つてきた。

可能な限りガイに付き従い、それが難しい時はガイを好ましく思つてゐる同志に見張りを頼み、

間違いが起きる隙を与えるまいとしてきた。

おかげで先王が亡くなるまで、ガイの貞操を守り切ることができたが――

「先王陛下の行きすぎた寵愛の後は、新王陛下の冷遇……ますますガイ様が生き辛くなられるのは、

本当に忍びないですよ」

新王イヴァンは玉座に就いてすぐ、ガイに過酷な任ばかりを押し付けて心身を追い詰めた。

そして極めつけが今回の王命だ。

集めた情報によると、遠く離れた異国の邪竜討伐を命じるらしい。本来はする必要のないことだ。しかも、人の力では敵わぬはずの邪竜討伐の王命。あまりに理不尽な内容に、ウーゴは胸を搔きむしりたくてたまらなかつた。

不意に廊下から忙しく述べてくる足音が聞こえてくる。

パンツ、と慌ただしく執務室の扉を開けたのは、広間に向かわせていた部下だつた。

「ウーゴ様！ ガイ様に邪竜討伐の王命が下りました！ しかも討伐隊を組むことは許されず、ガイ様単身で向かうよう^{おえつ}にと……」

部下の声には次第に嗚咽^{おえつ}が混じり、途中で言葉が途絶えてしまう。

ざわつく部隊長たちの中、ウーゴは目を閉じ、自分の胸が荒ぶつていくのを感じとる。

（ああ、やはり……イヴァン陛下はそこまでガイ様を恨んでいらっしゃったのか。ガイ様はただひたすら王に仕え、國のために戦われてきたというのに！）

あまりの不遇に今すぐ剣を抜き、現王を討ちたい衝動に駆られる。

しかし、それはガイの望みではない。行動に移せば間違いなくガイは深く悲しみながらウーゴに剣を向け、斬り捨てた上で邪竜討伐に向かうのが目に見えていた。

ガイにそんな思いはさせたくない。

そしてもし邪竜討伐に成功して帰還しても、またイヴァン王に難癖をつけられて冷遇されるだけ。

この現状を続けた先に、ウーゴはガイの幸せを見出すことはできなかつた。

「……もういいでしよう……ガイ様は自由になるべきです」

思わずウーゴは心の声を零してしまふ。

集まつた部隊長たちは静まり返り、一斉にウーゴを見た。

「ウーゴ様、それではあの計画を？」

顔を覗き込んで聞いてきたテオに、ウーゴは頷く。

「やりましょう。皆、ガイ様を想う気持ちに偽りがなければ、どうか私に合わせてください」

それぞれを見回しながら告げると、部隊長たちはいずれも口を固く結びながらも頷いてくれる。

先王が亡くなつた頃から、ウーゴが中心となつて作り上げ、ガイを想う同志たち——ガイ親衛隊に伝えてきた計画だ。話を切り出した時、同志たちはもちろん動搖した。しかし同時に理解もしてくれ、いつでも実行に移せるように覚悟を決めてきた。

いざ計画を実行することになつた途端、ウーゴの胸は締めつけられる。

本当はこんなことなど考えもしたくない。それでもガイのためだと何度も自分に言い聞かせ、心の準備を整えていく。

ギィイ、と扉が開き、ガイが執務室に入つてくる。

そして振り向いたウーゴは胸の内を重くしながら、ガイの問いかけに答えた。

「国にとつて貴方は素晴らしい将軍でしたが、我々にとつては悪夢のような上官でした。もう一度

と顔も見たくありませんが、邪竜討伐の吉報を心よりお待ちしています」



ガイが去つた後、部隊長の誰かのすすり泣く声がした。

それを皮切りに他の部隊長たちも恥ずかしげもなく泣き出し、男たちの嗚咽おえいが室内を満たした。

「ガイ様あ……」

「やつぱりここに残つてほしいい」

「誰もガイ様のことを嫌いだなんて思つてないですよお～～」

口々に漏らされる嘆きながら、唯一涙を流していないウーゴが部隊長たちを見渡す。

「よく我慢してくれました。ガイ様はもう自由になるべきです……この国に未練が残れば、あの方はどんな理不尽も苦難も受け入れて戻つて来てしますから——」

涙は一滴も落とさなかつたが、ウーゴの瞳は潤んでいた。

もうこの国に自分の居場所はないと思わせて、國の外で自由を手に入れてほしい——だから皆で示し合わせて冷ややかな態度を取つた。

ガイの下にいた誰もが、身も心も魅力に溢れている上官に惹かれていた。憧れていた。どんな無茶な命令もガイのためならばと、末端の兵まで命を惜しまずに戦い抜いた。

軍は何千人という規模だ。そのすべてがガイ親衛隊であったことを、本人だけが知らなかつた。

これでガイとは二度と会えないだろうとウーゴは思う。

しかしそれと同時に、どれだけ自分たちが突き放しても、ガイは戻つてしまふ気がしてならなかつた。

そつと目を閉じ、ウーゴは心の中で願う。

（ガイ様、どうかお気をつけて……）

室内的鳴咽が收まり始めた頃だつた。

執務室に慄然とした顔の騎士が現れ、ウーゴに報告してきた。

「ウーゴ様、失礼します。今しがた騎士が一人、退役届を押しつけて飛び出していきました」

「退役、ですか。ガイ様が国を出ていくとなつた以上、同様の者が出てきそうですね。わざわざ報告に来たということは、ただの騎士ではないと？」

「はい。ガイ様が遠征などの際に従者をしていた、エリク・マレーロです」

エリクの名を聞いた瞬間、ウーゴを含めた誰もが固まる。

若いながら腕が立ち、ガイにも期待されていた新入りの騎士。

そして軍の誰に対しても敵対心を覗かせ、不用意にガイに寄せつけまいとしてきた人物だ。これが他の者ならば強く出られたが、エリクはマレーロ伯爵家の次期当主となるはずだつた男。勘当されたとはいへ、名家の肩書きのせいで彼の身勝手を見逃すことは多々あつた。

親衛隊の中でも超強火な同担拒否のガイ好きガチ勢。それがエリクだつた。

この場の誰もがピンときた。

そしてウーゴと部隊長たちの声が見事に揃つた。

「「「「あの野郎、抜け駆けしやがつた……っ！」」」

ガイたちが王城を出立して五日が経過した。

馬を走らせ、順調に母国レアランダ王国と隣のサグニア王国の境界にたどり着く。国が切り替わる山中の街道の近くには、国境警備の砦がそれぞれ建っていた。

つい五年ほど前まで、この二国は戦争をしていた。

何度も激戦を繰り広げ、ぶつかり続けて、ようやく双方の落とし所を見つけて停戦協定を取り交わすことができた。今では何事もなく国を行き来することができ、人々の交流や貿易も活発に行われている。

馬を歩かせながらガイは砦を見上げ、静かな様子に目を細める。

(平和になつたものだ。あの激戦からもう五年も経つたとはな)

未だにあの戦いの日々は、ガイの中で鮮やかなままだつた。

多くの血を流した。敵も味方も数多の命を散らし、その顔ぶれは目まぐるしく変わつたが、ガイは常に戦場の前線に立ち続けた。そして終戦までずっと、幾度となく剣を交えていた敵将もいた。

「どうかしましたか、ガイ様？」

ガイが思わず懐かしんでいる、隣のエリクが馬上から声をかけてくる。

我に返り、ガイは馬を近づけてエリクに答えた。

「サグニア王国との戦を思い出していたところだ。この砦には世話をなつた

「私はまだ入隊前でしたが、激戦だったことは聞き及んでいます。ガイ様の獅子奮迅の戦いぶりは、社交界でも城下町でも、いつも噂になつていきました」

心なしかエリクの頬が紅潮し、目も輝き、子どもが憧れを語るような顔に見える。

悪い気はしないが気恥ずかしさを覚え、ガイは辺りを見渡して気を紛らわせる。

「あの頃は目の前の強敵をどう迎えるかで手一杯だった。サグニア王国には、どんな策も力で押し返してしまった猛将がいたからな」

口に出すと、ガイの脳裏に激戦の記憶が鮮やかによみがえつてくる。

彼の猛将はとにかく一騎打ちを好んだ。

兵を引き連れて上手くこちらの軍を四散させた時など、普通ならば、将である自分を別隊に追い詰めさせて討たせるはずなのに――

『ガイ・デオタード！ いざ尋常に勝負！』

そう言いながら、それはもう嬉々として鷹のような鋭い目を輝かせ、猛将はいつも真っ正面から挑んできた。彼の渾身の一撃を剣で受け止めた日は、しばらく両腕の痺れが取れなかつたものだ。猛将ゲイン・カレロ。

大柄で筋骨隆々とした大熊のような男だ。しかし常に楽しげに戦いを挑んできていたせいか、何年も命のやりとりをしてきたというのに憎めない男でもあつた。

「——さま……ガイ様！」

エリクに呼ばれてガイは我に返る。

戦は終わり、両国の間には和平が結ばれた。彼の猛将と剣を交えることはもうないのだと少し寂しく思った後、ガイはエリクを見た。

「なんだ？」

「実は先ほど、隣国の砦の上に光るものが……望遠鏡でこちらを見ていました」

スツ、と表情を引き締めると、エリクが馬を寄せてガイに囁く。

「もしかするとガイ様だと気づかれたかもしません。何か仕掛けてくる恐れもあります。早くここを離れましょう」

「ああ。和平を結んだ以上、襲われることはないとと思うが……長くここにいれば、いらぬ誤解を生んでしまいそうだな」

互いに頷き合い、馬を歩かせて国境を跨ぎ、サグニニア王国に入る。

そのままおとなしく下り道が続く森の中へ進もうとしたその時だつた。

一頭の馬が駆けてくる足音と、鋭く通つた声が迫つてきた。

「ガイ・デオタード将軍！ よくも平然と我が国に足を踏み入れることができたな！」

ガイが振り返るよりも早く、エリクが前に出ていた。

「下がってください、ガイ様！」

ギイイインッ！ と剣が交わる音が辺りに響く。

自分よりも先にエリクが対応できたのは、心から警戒を怠らなかつた証だ。これが初めてではない。従者をさせていた時も何度もガイよりも先に攻撃に気づき、前に出て受け止めた実績がある。もしエリクが動かなくとも自分で対応できたが、経験豊富な自分よりも早く動けるエリクは末頼もしいと、日頃からガイは感心していた。

余裕が生まれてありがたいと思いながらガイは馬を走らせ、戦闘の渦中から距離を取り、旋回して衝突の全貌を目にする。

エリクが剣を受け止めて競り合っているのは、長い赤髪をなびかせた中性的な顔の男だつた。顔だけ見れば、高貴な令嬢と見間違いそうなほど美しさだ。しかし骨格や競り合う力強さは紛うことなき男性のものだ。

ふと、彼の深緑の瞳と目が合つた。

途端に男は悪鬼のごとく目を吊り上げ、歯を剥き出しにして怒りを露わにした。

「ああ、いつ見ても憎らしいその顔……っ！ 今日こそは貴様の命を我が手で散らしてみせる！」
「そなはさせない！ ガイ様に仇なす者は、たゞ王であろうが軍神であろうが私が許さない！」
襲撃者がなぜここまで自分に怒りを向けているのかも、エリクの猛火のような気迫も、ガイには

理解ができず首を傾げる。

（なぜ赤髪の彼は俺を目の敵にする？ それとエリク、王も軍神も尊きものだ。いくらたとえでも□にしていいものじやない）

心中で呟いた後、ガイは愛用の剣を抜いて静かに構えた。ぽん、と踵かかとで馬腹を蹴ると、戦う二人に向かって走らせる。

ガイの切つ先が狙うのは襲撃者の手綱だ。ブウンッ——軽く振った剣の先が、巧みに動かしていた手綱を断つてしまう。

「うわっ！」

襲撃者が体勢を崩して落馬する。その後、ガイはエリクに素早く目配せした。

「行くぞ、エリク。着いて来い」

「は、はい！」

馬の脚を止めず、ガイは森へ続く坂を下っていく。エリクも戦意を昂らせたまま、共に馬の動きを揃えて続く。

ガイがわずかに背後を向いて確認すると、あつという間に襲撃者は見えなくなつた。追いかけてくる気配はまだない。

代わりに言葉が飛んできた。

「この泥棒猫がつ!!」

（……なぜ泥棒猫？ 俺が彼から何かを奪つたというのか？）

あんなに見事な赤髪と綺麗な顔、一度見れば忘れないことはないだろうとガイは思う。だから理解できない。あの男と会つたことはないはずなのに、なぜ泥棒呼ばわりされたのか。ガイにとつては謎すぎた。

「あんな見当違いの逆恨みをする愚か者、始末しなくてもいいのですか？」

「ここはもう隣国で、襲ってきた者も隣国の軍服を着ていた。下手に相手をして倒せば、和平が崩れて母国に迷惑がかかる。逃げるのが正解だ」

「国境を離れれば、もうあの赤髪の彼と会うことはないだろう。そう考えてガイたちは馬を走らせる。風を切り、森の深い緑の中を疾走させていく。

（……後ろから嫌な気配がするな）

ガイは唐突に手綱を引いて馬の脚を止め、耳を澄ます。エリクもすぐにガイを真似ると、忌々しげに顔をしかめた。

「これは……追つて来ていますね。しかも騎馬兵を連れているようです」

「厄介だな。ただこの地を通りたいだけなのだが……」

わずかに目を細めた後、ガイは素早く愛馬から降り、手荷物を外した。
「すまないが、このままお前だけで走つてくれ。俺を探さなくていい。無事に逃げ切るんだ」
話しかけると馬は言葉を理解したかのように、小さくいななく。